

第4学年 国語科の実践

1、単元名 読んで考えたことを話し合う 「ごんぎつね」

2、単元目標

- ・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- ・文章を読んで考えたことを、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うことができる。

関心・意欲・態度	読むこと	話すこと・聞くこと	書くこと	言語に関する知識・理解・技能
叙述に着目して物語を読み、感じたことや考えたことを進んで話し合おうとしている。	・会話や心情表現、行動から人物の性格や気持ちを読み取っている。 ・情景を表す文や語句に着目して読んでいる。 ・人物の行動や性格、人物と出来事との関わりについて読み取り、感想をまとめている。	友だちの発表を、自らの考えと関わらせながら聞き、発言している。	・伝えたい内容が読み手に伝わるように、文章の組み立てや表現を考えて書いている。	言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。

3、ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

【聴く・話す】

「聴く」については、10月に自分たちが目指す聴き方を子ども達が話し合って決めた。10月から授業の始まる前にこの指標を全員で確認して徹底に努めている。相手の方を見て話を聞くことの定着は少しずつ見られている。

課題に対して自分の思いをしっかりと持っているか、一人ひとりのノートを見たり、個別に話したりして確認をし、その上で発表の時間を設けている。自分の思いと発言している子の思いが同じなのか、違うのかいつも考えながら話を聴こうと指導している。

「話す」については、自分の思いを発表できることを課題として取り組んでいる。週に一回「二者択一ゲーム」を行い発表しやすい内容で、全員が自分の考えを発表する機会を設けている。また、授業の導入部分では全員が考えを発表するようにしている。ペアで話し合う時間も9月からは設けている。自主的に挙手して発表することが楽しめるよう、指導を進めている。

【関わり合い・ひびき合い】

授業はみんなで行っているという意識を高めていきたい。

子どもたちが、普段の生活の中で見つけた問題点などを学級会で話し合っている時は、互いに話を聞き合って意見を出すことができる。なるべくどの教科に対しても、子どもの実体験に基づく考えが出るよう発問を工夫するよう心がけている。

4、単元と指導について

①単元について	②指導について
本作品は、4年生になって3つ目の物語文である。この物語は、ひとりぼっちの子ぎつねごんが、いたずらばかりしていたが、兵十のおっかあに死に接していたずらを後悔し、次第に変わっていく姿が書かれている。そして、第6場面では、ごんが兵十に分かってもらうには死を代償にしなければならないという悲しい結末が待っている。登場人物の行動、心情が生き生きと描かれており、ごんがどんなきつねか、兵十がどんな人物かを表現から考えることができる。心情の変化もとらえやすく、どうしてそのように変わっていったのか因果関係を考える中で、読みを深めることができる。 また、1～5段落まではごんの目線に立って物語が展開されている。しかし、第6段落では兵十の目線に立って物語が語られている。ごんに対する感情移入、同化した読みにとどまらず、撃ってしまった兵十の気持ちを考える活動を通し、感受性を育て、それを自己表現に結び付けて人に伝える意欲も高めていきたい。 そして、ごんぎつねの学習を通して、ごんと兵十二人の悲しさを感じ、分かり合うことの難しさを深く読み取り、想像しながら読んでいくことができるようにしたい。	《切実な問題について》 初発の感想を全員が発表し合う場を設ける。その初発の感想からはごんについての考えが多く出ると予想される。また、本学級では「ごんが撃たれるのはかわいそう」という意見が多くでる一方、「ごんが撃たれるのは仕方ない」と発言する児童もいるだろう。このズレに対して「なぜだろう」と学習意欲が生まれると考える。 そして、この学習課題を進めるにあたって、第5, 6段落のごんの行動に疑問が生まれるのではないかと考える。第5段落で兵十は「くりをくれたのは神様」だと勘違いをし、それに対してごんは「神様にお礼を言うんじゃないか」と言っている。しかし、ごんは次の日も兵十の家にくりを運びに行く。「神様と勘違いされてもいつものようにくりを持っていくごんの気持ちはどんなものだろう。」「なぜごんは次の日もくりをもっていったんだろう。」などのごんの気持ちと行動の矛盾に切実な問題が生まれると考える。今までの学習をもとに、この疑問にせまっていきたい。 《ひびき合いについて》 初発の感想や、授業の子どもたちの発言に対して、教師としてなるべく言い換えを行わず、子どもが使った言葉を大切に扱っていきたい。同じ課題に取り組んでいても、一人ひとり考え方や伝え方に違いがあることを感じるができるだろう。話し合い活動を通して「同じ考えだな」「少し違う考えだな」と感じることで、その結果がひびき合う姿であると考えている。

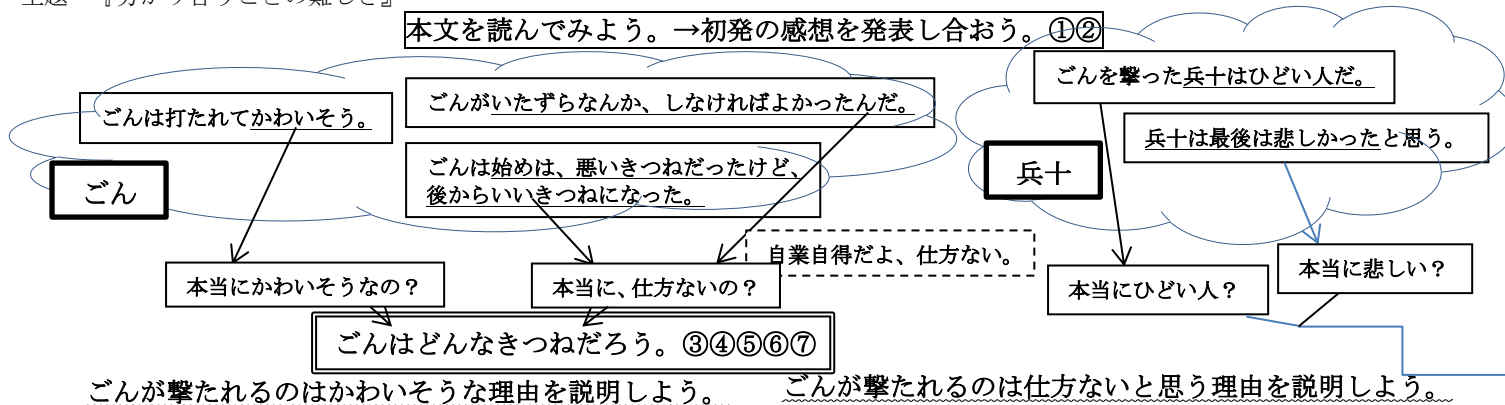
5、単元構想 第4学年国語科 「読んで考えたことを話し合おう ごんぎつね」(全12時間)

単元のねらい

- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- 文章を読んで考えたことを話し合い、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うことができる。

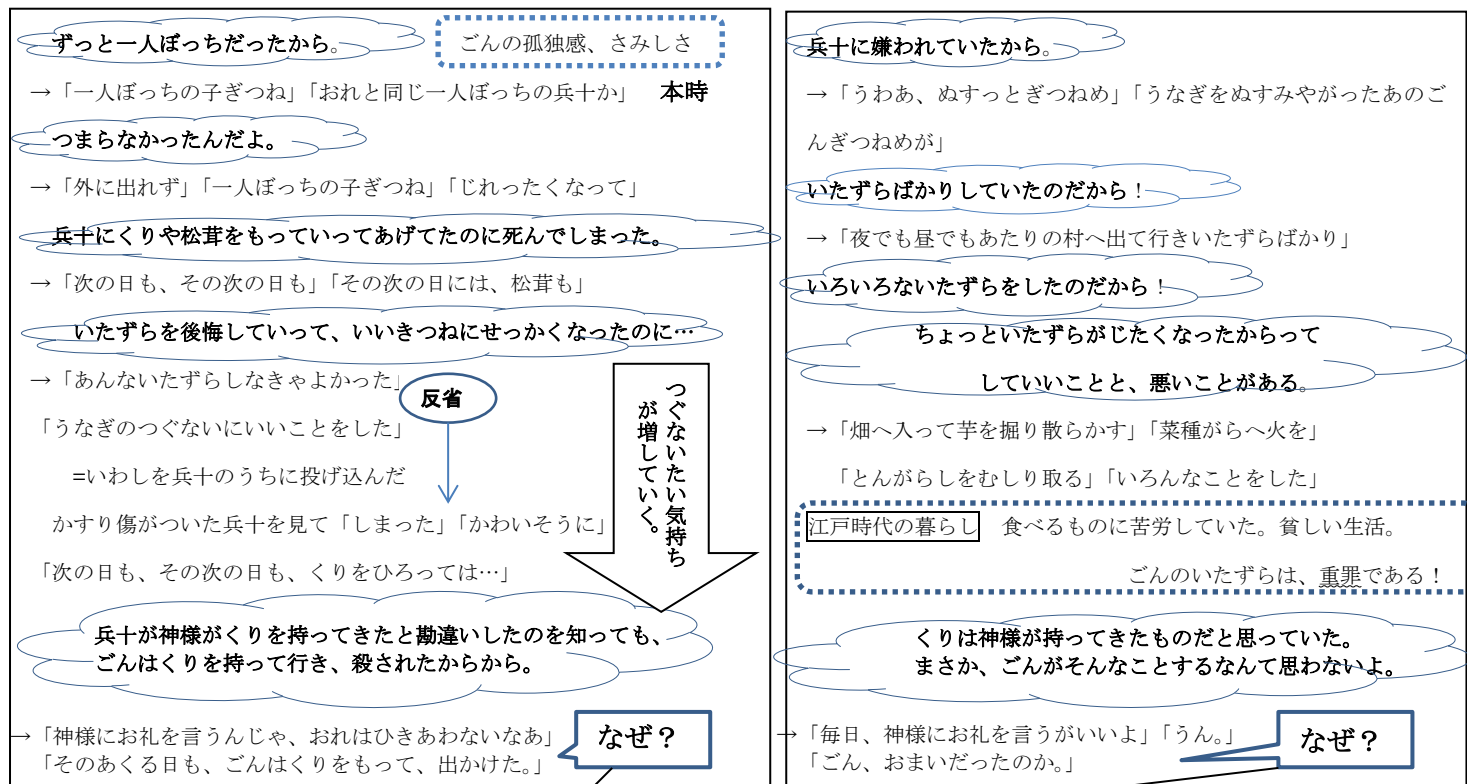
主題 『分かり合うことの難しさ』

本文を読んでみよう。→初発の感想を発表し合おう。①②



ごんが撃たれるのはかわいそうな理由を説明しよう。

ごんが撃たれるのは仕方ないと思う理由を説明しよう。



なぜ、そのあくる日も、ごんはくりを持って行ったのだろう。⑧⑨

ごんぎつねの物語を振り返ろう。⑫

ごんは兵十をずっと思っていた。つぐないがしたい。
ごめんね、兵十。おれだって気付いてほしかった。
1人の兵十をほっておけないよ。一人はさみしいもんな。

気付いてほしい。兵十に分かってほしい。一人はいやだ。
ごんの気持ちがとても強くなっていた。

ごんの気持ちは届いた？→兵十の気持ち「なぜ？」
 ごんの気持ちは伝わらなかった。伝わればよかったのに…
 少しでもごんの気持ちは伝わったと思う。
 最後は、残念な終わりだけど、仕方ないと思う。
 兵十はごんの気持ちを知ることではできなかったけど、
 ごんを悪いきつねとはもう思わなくなるからよかった。
 お互いすごくつらいと思う。かわいそう。

撃たれたごんの気持ちはどんなだったかな。ごんを撃った兵十の気持ちはどんなだったかな。⑩⑪

「ぐったりと目をつぶったまいうなずいた」ごんの気持ち
 やっとわかってくれたのか… 神様なんかじゃないぞ
 死にたくない つぐないができたかな もっと兵十といたかった

火縄銃を撃った時の兵十は…
とうとうやったぜ！ このぬすつとめ！
「ごんおまいだったのか」
なぜ？ どうして？ わからない… すまん。

目標

登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。

学 習 活 動	主な支援・留意点 ★評価
ごんぎつね ごんがうたれてしまって かわいそう どちらか自分の考えの理由を しかたない 教科書から探そう。 ごんのいたずら いたずらばかり 畑に入ってもほり散らかしたり、 菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、 とんがらしをむしり取ったり <u>いろいろなことをした。</u> 人間（兵十）から するととっても つみが重い！ なぜごんはいたずらをするのだろう。 ・おもしろかったから ・楽しかったから ・ひまだったから ・何も考えてない ・さみしかったから ・かまってほしかったから ・子ぎつねだから なぜそう思うのか ちょいといたずらが したくなかったから → ずっと一人ぼっち ごんはずっと一人ぼっち 一人で住んでいる。 山の中、森の中にあな 子ぎつねなのに… かわいそう… さみしいよ！ もう一度考えてみよう。 あなたはごんのいたずらについてどう思いますか。	・自分のペースで最初から P7L7 まで音読する時間を設ける。 ・前回書いた「いたずらについてあなたは思うか」の各自の考えを配布する。 ・クラスみんなが自分と似た意見なのか、少し違うのか確認する。 ・いたずらをする理由になる部分を憶測ではなく叙述から探そう伝える。 ・ごんの孤独さが理解できるように、山の中での生活を想像できるよう写真を何枚か用意して提示する。 ・前回の授業で考えた「いたずらについてどう思うか」の意見と、今日授業を受けた後に「いたずらについてどう思うか」を考えノートに書き、意見に変化があったかどうか確認をする。 人間目線→重罪 ごん→さみしい ○ごんと兵十の間にどうしようもないすれ違いがあることに気づけるようにしたい。 ★叙述をもとに登場人物の気持ちを想像して読むことができています。〔読〕 ★ごんのおかれている状況を考え、友達の意見と自分の意見を関わらせながら、発言している。〔話〕

7、実践を終えて

本時まで

物語文を扱っていく際、ただ教師の出した課題に答えていくのでは、子ども達にとって切実な問題とならず「考えてみたい」「他の人の意見を聞きたい」と主体的に課題に取り組むことができないと考えた。そこで、子ども達の感想の中から問題を見つけていくことにした。まず、教師が物語を読み感想を全員が持つ時間を設けた。その後、全員で交流があった。

発表の場では、ごんについての考えが多く出た。その中で、「ごんが撃たれるのはかわいそう」という意見が大半を占める一方、「ごんが撃たれるのは仕方ない」と発言する児童もいた。この感想のズレに対して子ども達は「なぜ、そう思うのだろう」と疑問を抱いた。この疑問を解決することを、本単元の柱とした。子ども自身が抱いた疑問であれば「考えてみたい」「他の人の話を聞いてみたい」という学習意欲につながり、解決できた喜びも持てると考え実践した。

またこの疑問を解決する際、「かわいそう」「仕方ない」の両極端だけではなく、「まあかわいそう」「仕方ないけど…かわいそう」などの子どもの言葉があった。その言葉を大切にしたいと考えた。そこで表を作り、左端から「かわ

いそう」「まあ、かわいそう」「ちょっとかわいそう」「どちらも」「ちょっと仕方ない」「まあ、仕方ない」「仕方ない」とし、子どもの名前プレートをその表に貼り、今自分はどう思っているのか細かく分かるようにした。毎時間、子ども達は、自分の考えがどの位置にあるのか真剣に考え授業が終わるたびにプレートの位置を変えていた。また、クラスの友だちがどう思っているのかもこの表から分かり、「〇〇さんは、こう思ってるんだね。」と会話する姿が見られた。

そしてその後、話し合いを進めていくと「ごんがうたれたのはかわいそうか仕方ないのかは、ごんのいたずらがポイントである。」という話になった。ごんのいたずらの内容や背景について理解することが、「かわいそう」なのか「仕方ない」のかを考える際の理由となるからである。そこでまずは、兵十の立場に立ってごんのいたずらについて考えた。本文から、兵十の暮らしぶりや、家族について押さえた。また、江戸時代の時代背景を視覚教材を使うなどして説明した。兵十にとっては、ごんのいたずらがとても迷惑で罪が重いことを学習した。このことが「仕方ない」と考える子ども達の理由であり、「かわいそう」とごんに寄り添って考えていた子ども達には今までなかった視点だった。そのため「あ、人間側からすると、ごんはうたれても仕方がないのか」と自然と声があがった。

本時について

本時ではごんの視点に立ち、ごんにとってのいたずらはどのようなものなのか考えていった。まずは、ごんがどんないたずらを行ってきたのか本文から確認した。「いたずらばかり」の「ばかり」や、「火をつけたり」の「たり」、「いろんなことをした」の「いろんなこと」など、言葉の持つ働きを考え、いたずらを多く行っていたことをはじめに確認した。

その後「なぜごんはいたずらをするのだろう」と投げかけた。クラス全員が自分の考えを持つ時間を設けた。発表の場では「ごんはいたずらをするのが楽しかった、面白かった」等の意見を本文に書いてあることを理由に述べることができた。また「ごんはさみしくてかまってほしくていたずらをした。」という考えを発表する子どもも多くいた。本文の「ずっと一人ぼっち」に注目して、「ごんは一人でかわいそう」「一人はさみしいし、退屈だし、いたずらしてしまう。」と子ども達は考えた。このことは「うたれてかわいそう」と考える子ども達側の理由となった。

この授業後、名前プレートが「どちらも」の中央部分に集まり、「かわいそう」や「仕方ない」にネームをおく子どもがいなくなった。そして、本時の最後に今までの 4 時間を通して、もう一度ごんのいたずらについてどう思うかノートに書いた。ノートには「人間からすると罪が重いが、ごんからすると友だちがほしくてやったことだから…」等の記述があった。2 人の視点に立って考えたことで「うたれてかわいそう」なのか「仕方ない」のかをより深く考えることができた。

本時以降について

ごんのいたずらについては「ごんの気持ちはよく分かる。だけどやはりいたずらはいけないこと」と子ども達の間で話し合いで考えがまとまっていった。いたずらを後悔して兵十により行いをしていくごんの変化を「ごんメーター」を作って確認した。（ごんメーター〔心情曲線〕：ごんが悪いきつねから、いいきつねに変化する様子を折れ線グラフのようなものにまとめていったもの。ごんの変化を視覚的に一目で分かるようにする効果がある。）ごんは物語の始めは「いたずらばかりして悪いきつね」だったが、本文の言葉一つひとつに注目していき、いたずらを反省する場面、償いをする場面から、少しずつごんが「いいきつね」に変わっていく様子を追うことができた。

その後第 5、6 段落のごんの行動に子ども達は疑問を持った。第 5 段落で兵十は「くりをくれたのは神様」だと勘違いをし、それに対してごんは「神様にお礼を言うんじゃない」と言っている。しかし、ごんは次の日も兵十の家にくりを運びに行く。「神様と勘違いされてもいつものようにくりを持っていくごんの気持ちはどんなものだろう。」「なぜごんは次の日もくりをもっていったんだろう。」などごんの言葉と行動の矛盾が問題になった。この問題に対して、今までの学習の中で「ごんの心情の変化」をクラス全員で追ってきたため「ごんの償いたい気持ちがとても強くなっていた。だから栗や松茸を次の日も持っていった。」とまとめることができた。

そして、最終場面でうたれたごんの気持ちとうった兵十の気持ちを考えた。ここでは「兵十がはやくごんだと気付けば…」「とてもせつない話」などの考えが多く出された。単元はじめの「ごん」についての感想から、双方の視点に立ち考えてきたことで、「ごんと兵十のすれちがい、分かり合うことの難しさ」についての感想へと内容に深まりが見られた。

成果と課題について

課題として、一つ目に子ども達の力で問題解決に向かっていけるような学習展開を考えていくことである。課題を解決するための手がかりとなる叙述に子ども自身が気付いていけるようにしていきたい。そのためには、子どもの気付きを待つ心構えをもつこと、直接的に言うのではなく、気付きを促す手立てをできるだけ多く考えておくことなどが必要であると考え。今後は単元に入る前に子どもの思考の流れをもっとしっかりと予想し、様々な場合を想定しておくことで、子どもの学びを支援していきたい。

二つ目に、本文に基づいて子ども達が考えを持てるよう支援することだ。「教科書に〇〇と書かれていたから、〇〇だと思いました。」と叙述を根拠にして考えを持つことが大切なのだが、自身の授業を振り返ると、ただ自分の考えを言うのみで終わってしまう場面があった。今後はもっと「本文に立ち返る」ことを念頭に置き、どこを読み、そう考えたにかを問うことを心がけたい。また、根拠となる叙述を板書していく、掲示していくなど、教師が本文を大切に扱っていく姿を示すことで叙述をもとに読みを深めていけるようにしたい。

成果としては、一つ目に全員が意見を発表する時間を確保できたことだ。座席表を使ったり、話し合いの時間を多く設けたりすることで、様々な意見を聞き考えを深めることができた。また、このような時間を設けたことによって「同じ」「違う」と子ども達が意思表示することができるようになってきた。さらに「ここは似ているけど、ここはなんだか違うな。」と感じたり「もっとこうだと思うよ。」と言えたり、「同じ」や「違う」以外のことも言えるようになった。このことは、子ども達のひびき合う姿であったと感じている。

二つ目は、最後の振り返りカードに「悲しい話」や「せつない話」「二人が早く気付けば」「動物と人間で仲良くできればいいのに」など、はじめの感想では、見られなかった考えが出てきた。これはごんぎつねを深く読み取ればこそ出てくる振り返りであると感じている。さらに、ごんぎつねがお気に入りの物語になったと、自分でごんぎつねの絵本を持ってくる子もいた。想像して読み取ることができ、物語を読むことが少し好きになったという子も見られた。このような子どもの姿の変容が見られたことが、一番の成果であると考えている。